

図の上部には、次の文がある。

白浪^{しらいなみ}

五人男^{をどこ}の内

日本駄右衛門

坂東

彦三郎

—

問八^とれて名乗^なも

おこかましいが産^うれ八遠州^{えんしゅう}浜松^{はまつざい}在

十四^{とし}の年^{ねん}から親^{おや}にはなれ身のなり八^やひも

しら浪^{なみ}のおきをこへたる夜働^{よはたら}き盗^{ぬす}ミ八^やするが非^ひ

道^{だう}八^{はち}せず人に情^{なさけ}をかけ川^{がわ}から金谷^{かなや}をかけて宿^{しゆく}々^{じゆく}で

義賊^{ぎぞく}と噂^{うわさ}高札^{かうさつ}に廻^{めぐ}るはいふのたらひごしあぶない其身^{そのみ}の

きやうがいも最早^{もはや}四十^{にん}に人間^{にんげん}の定め八^やわづか五^ご十年^{ねん}

六十^{むそ}余州^{じゅう}にかくれのねへ賊党^{ぞくと}の首領^{しゅりやう}日本^{にっぽん}駄右^だ門^{もん}

白浪^{しらいなみ}五人男^{ごにんをとこ}の内

赤星^{あかほし}十三

中村^{なかつむら}翫雀^{くわんさく}

二

又^{また}其次^{そのつぎ}に連^{つら}なる八^や以前^{いぜん}八

武家^{ぶけ}の中小^{ちゆうしやう}性^{しやう}

古主^{こしゅう}の為^{ため}に切取^{きりとり}も

にぶき 刃の腰越や

砥上が原に身の錆

を研直しても抜かねる

盗心心の深緑柳の都

谷七郷 花水橋の切取から 今牛若と名も

高く忍ぶ姿の人の目に月影が谷御こしが嶽

けふぞ命の明がたにきゆる間ちかき

星月夜其名も 赤星十三郎

白浪五人男の内

弁天小僧菊之助

尾上菊五郎目 三

さて其次 八江の嶋の

岩本院の児あがり

ふだん着なれしふり

袖から髭も嶋田に

ゆめがはま 打込浪

にしつほりと女に化けて

つゝもたせゆだんのならぬ小むすめも

こぶくろさか
小袋坂に身のやぶれわるいうき名も

たつ
龍の口土の牢へも二度三度だん こへる

とりぬかす
鳥居数八幡様の氏子にてかまくら無宿

かたがき
を肩書に嶋に育て其名さへ弁天小僧菊之助

しひな三にんをとこ
白浪五人男の内

南郷力丸

市川左団次

四

あと
つゞいて後に扣へし八汐風

こゆるぎ
あらき小動の磯馴の

まが
松の曲りなり人に

なつ
成たる 浜育仁義

ミち
の道も白川の夜

ふね
船へ乗込 船盗人浪に

いなつま
きらめく稲妻の白刃

におどす人ころししよつて
立れぬつミとがハその身に重き

とら
虎が石悪事千里といふから八どぶで

そら
しまへ八木の空と覚悟八かねて 鴨立沢

あハ
しかし哀れ八身にしらぬ念仏 きらいの南郷力丸

白浪五人男の内

忠信利平

中村芝翫

五

初どんじりに扣へし八月の武蔵の

江戸育かきのおりから手くせがわるく

抜参りからぐれ出して

旅をかせぎに西国

を廻八つてしゆひも

よしの山まぶな仕

事も大峰に足

を止たるならの京

暮打と言て寺、や豪家へ入込

盗んだる金が御嶽の罪とが八けぬけの

塔の二重三重かさなる悪事に高飛なし後を

かくせし判官のお名前かたりの忠信利平